詩と散文のフリーペーパー

ひとかけの朝

1枚目

線を引く

眠りの中で
たった一枚のイメージを探している
わたしのものではない呼吸が
さえざえと
瞳の芯を揺り起こす夜明け

白く泡立つ波は
反復する動きを止めない
ぴんと伸ばした脚の先から
潮が満ち
なだめるように
這い上がる手のひらがある

ひとりとひとりがいることと
ふたりがひとつになることと
境界線の手前で
よせてはかえして
語り合っているつもりで
ほんとうはわたし
何も考えてなんかいない

静かに立ち去る気配がある
目を開けると
朝はもう
ひとつの顔で佇んでいた

「本当」の優しさ

一緒に帰る約束をしていた友達が居残り勉強をすることになったので、私も教室で待っていることにした。彼女は昨日の宿題の算数ドリルをやってきていなくて、学校でやっていきなさいと担任の先生から言われたのだ。

放課後の教室には、先生と友達と私だけがいた。先生は今日の四限目にやった社会科のテストの採点をしている。友達は自分の席に座り、分数の掛け算と割り算を頑張って解いている。私は友達の前の席に座り、振り返って彼女の手元をぼんやり見ていた。

その時、何でそんなことをしたのか覚えていない。忘れてしまったけど、私は彼女のドリルを指差した。たぶんドリルにプリントされている犬の顔が面白くてそれを伝えたかったとか、そんな他愛のないことだったと思う。

私の指がドリルに触れた瞬間、突然先生が私の名前を呼んだ。ピシャっと何かを断ち切ろうとするかのような、鋭い声だった。びっくりして振り返る。

「教えたら駄目よ」

そんなことはしていない。ただ指を差しただけだ。教えてません、と言ったけど、先生は厳しい表情のまま続けた。

「それは本当の優しさじゃないよ」

違いますと必死で伝えたし、友達もそう言ってくれたのに、先生は信じていないようだった。それきり黙って採点を続けただけだった。

答えがすぐに分かればその分早く帰れる。だけど友達が自分の力で問題を解く経験を奪っている。それは友達のためにならないから、本当の優しさじゃない。先生の言いたいことは頭で分かっていた。だけど実際に答えを教えたわけじゃないから、勘違いされた上に信じてもらえなかったことで、帰り道ずっと胸の中がモヤモヤしていた。

二十年近くが経ち大人になってからは、「本当の優しさ」という言葉だけが心の中で一人歩きをしている。例えばあの時、友達が本当に答えが分からなくて困っていて、それを助けたい一心で私が答えを教えたとして、そこに優しさはなかったんだろうか。優しさは、誰が決めるものなんだろうか。そもそも優しさに「本当」が付くことなんてあるんだろうか。

時々思い出しては、そんなことを考えている。

-- ひとこと --

はじめまして。貝崎瑞子と申します。
いつもは個人サイトに詩を公開しているのですが、縦書きで読むのが好きなので、フリーペーパーを作ってみました。文章を書くのも好きなので散文も入れています。
不定期になるかと思いますが、これからも続けていきたいなぁと思っています。
読んで頂きありがとうございました！
（貝崎）

詩・散文＝貝崎瑞子

2021年9月10日
https://hitokakenoasa.xii.jp/

← サイトに飛べます